

国内主要養殖魚の重要疾病のリスク管理技術の開発

現状と課題

- ・近年、主要な養殖種で原因が不明な疾病の発生がみられ、診断法がなく伝播経路等も不明なことから、対策の立案・実施が難しい状況
- ・国内に常在している疾病の中には国際的に輸出の障壁になるものがある

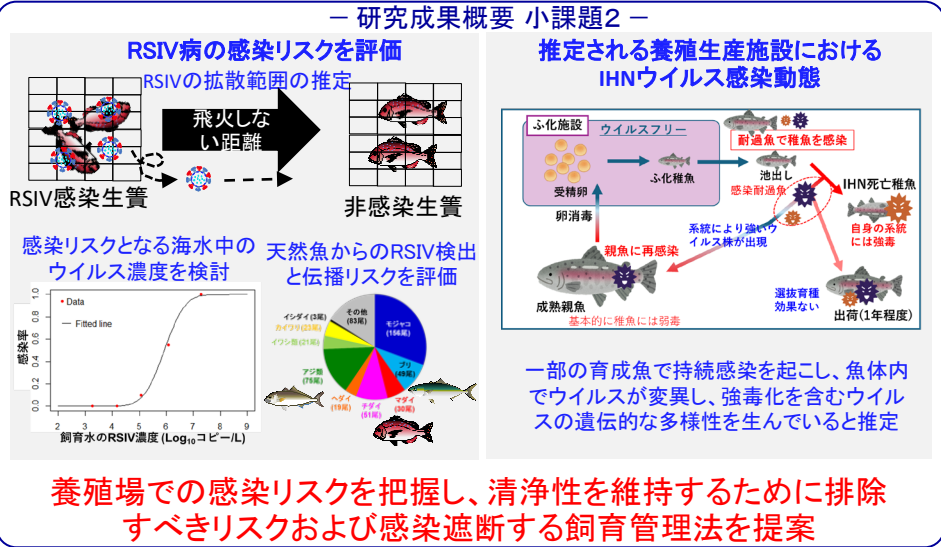
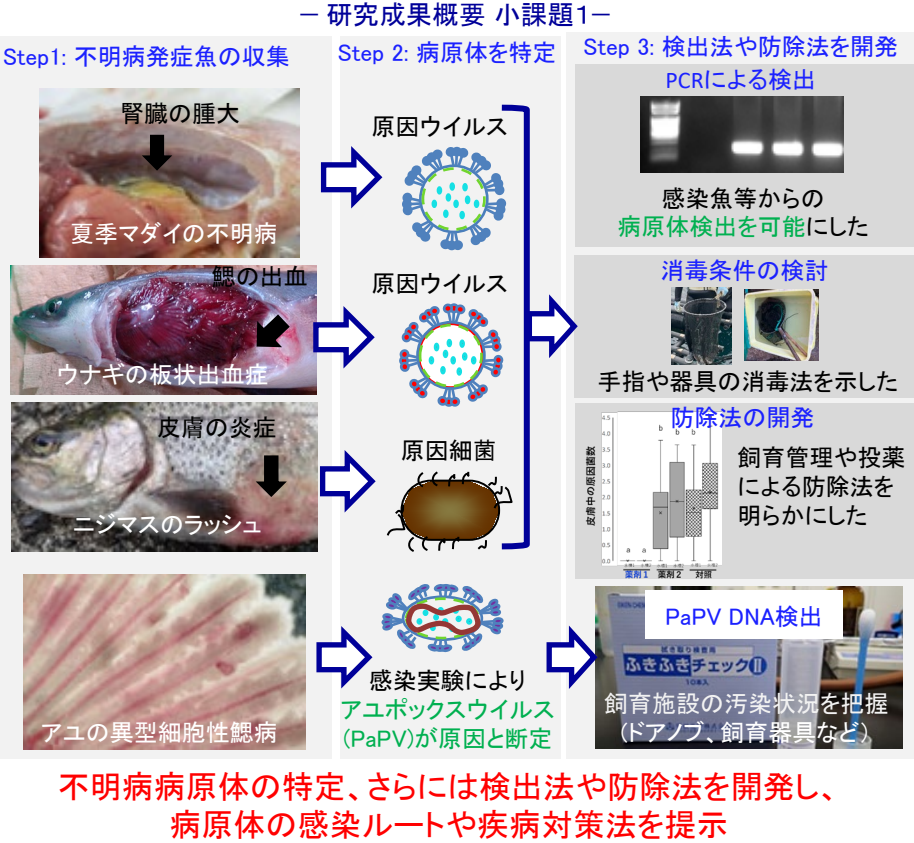


小課題1. 病原体が不明な水産動物疾病の診断法と防除法の開発

夏季・冬季に発生するマダイの不明病、ウナギの板状出血症、ニジマスのラッシュおよびアユの異型細胞性鰓病について、病原体分離や分子生物学的手法等を用いた病原体特定とその検出法開発し、その疫学情報を基に感染防除対策を構築することができる。
(水産研究・教育機構、東京海洋大学、日本獣医生命科学大学、栃木県、静岡県、愛媛県)

小課題2. 新たな清浄性管理手法の確立に資する養殖管理技術の開発

海産養殖魚におけるマダイイリドウイルス病(RSIV)や内水面の養殖マス類における伝染性造血器壊死症(IHN)を対象にゾーニングやコンパートメンタリゼーションによる清浄性確保が可能となる養殖管理技術を開発する。清浄性管理手法による養殖管理技術が開発されれば、当該水域や養殖施設での疾病発生を防止でき、清浄な水域・養殖施設間での種苗の導入・移動が可能になることで、広域的なまん延も防止できる。
(水産研究・教育機構、東京海洋大学、静岡県、長野県、愛媛県)



実施した成果の普及活動

- ・論文や学会等による成果の公表
- ・地方公設試の魚病担当者や養殖業者に対する成果報告会および講演を実施
- ・診断マニュアルやリーフレット等の配布により防除への取り組み方法を周知

見込まれる養殖業に対する本研究の効果

疾病発生時の早期診断、疾病を発生させない飼育方法、並びに清浄性管理技術の普及により

- 魚病の無い計画的な養殖が可能
- 清浄性確保により、輸出時の魚病に関わる検査手順の軽減や輸出促進